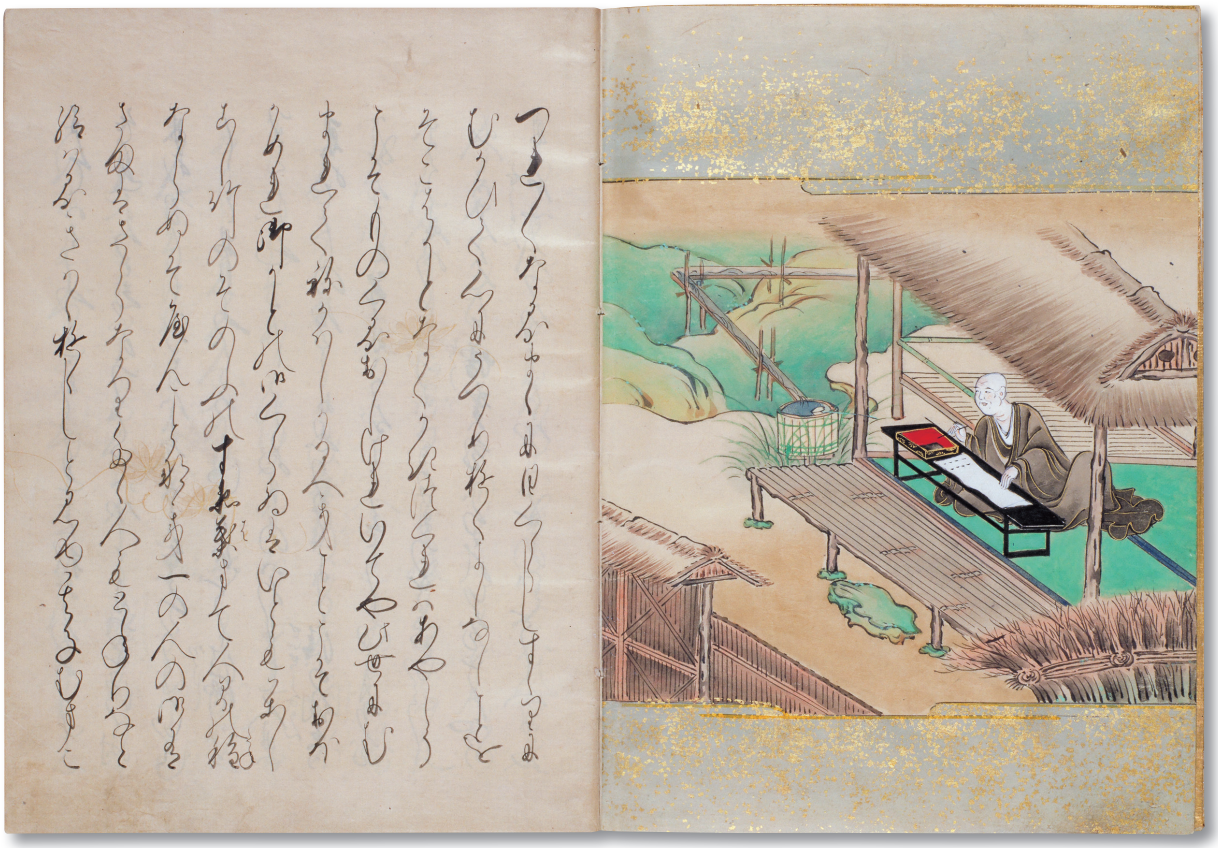
NO.89

蓬左

HÔSA



奈良絵本　つれづれ草

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

展示室1・2　徳川美術館本館

秋季特別展

復古やまと絵　新たなる王朝美の世界

―訥言・一蕙・為恭・清―

江戸時代後期から幕末にかけ、平安・鎌倉時代に描かれた古典的やまと絵を理想とし、日本古来の美を追求した画家たちが綺羅星のごとく登場しました。その中核をなした画家が、「復古やまと絵派」とよばれる田中訥言（一七六七～一八二三）・浮田一蕙（一七九五～一八五九）・冷泉為恭（一八二三～六四）・渡辺清（一七七八～一八六一）です。彼らは、幕末にかけて高まりをみせた復古思潮を背景に、名だたる古典絵巻の模写を通じて、自らの画嚢を肥やし、新たな王朝美の世界を築き上げました。

復古やまと絵は、数多くの古典絵巻を模写した訥言に始まります。その訥言に絵を学んだ浮田一蕙・渡辺清は、独自の画風で典雅なやまと絵の世界を展開しました。また、冷泉為恭は、有職故実に詳しく、早くよりその才能を開花させ、目にも鮮やかな王朝絵画の数々を創作しました。

本展では、復古やまと絵派の名品を一堂に会し、彼らが江戸後期から幕末という激動の時代によみがえらせた清雅なる王朝美の世界をあますところなく紹介します。およそ八十年ぶりに公開される名品や新出作品も多数出陳されます。ぜひお見逃しなく、御覧ください。

重要美術品　雨中蓮鷺図
田中訥言筆　江戸時代　19世紀
個人蔵

古くより訥言の代表作として著名な作品である。驟雨に見舞われた蓮池の情景を活写する。鋭い観察力によって捉えられた蓮の葉の描写もさることながら、雨に煙る蓮池の奥行き感を見事に表現している。

勝絵絵巻　模本　田中訥言模写　文化6年（1809）　森村記念館蔵

「陽物（男性器）比べ」と「放屁比べ」の二つの比べものを題材にした「勝絵絵巻」の模本である。文化6年（1809）訥言43歳の模本で、二十代の頃より数々の模本製作を手がけた訥言の剥落模写の到達点を示す。

展示室1

飾り金具

金属工芸には、仏具や武器・武具など、作品そのものを作りだすことと共に、他の美術品に付属する金具を製作するという大事な役割が求められていました。本来、金具とは器物に強度を与えるために取り付けられましたが、次第に金具自体に文様や細工を施して、「飾り金具」として器物を美しく飾り立てるようになります。「飾り金具」は脇役と考えられ、あまり注目されてきませんでしたが、調度品や書画を飾り、時に身体や空間をも飾り、日本の芸術・文化に豊かな表情を与えてきた欠かすことのできない作品となっています。

豪華絢爛な大名道具の多くにも、器物の文様に呼応するような図様や、美しく飾られた家紋など、驚くほど精密に文様が彫られた金具が付属し、その美しさをさらに煌びやかに際立たせています。

本展では、尾張徳川家に伝わった太刀拵や調度品、書画などに取り付けられた「飾り金具」の技法やデザインを紹介しながら、大名道具を彩ったこの小さな芸術作品の魅力に迫ります。

葵紋散螺鈿黄金造太刀拵（部分）　江戸時代　17世紀　徳川美術館蔵

「源氏物語の世界」（展示室1）

◆1月4日（日）～4月5日（日）※2月10日（火）は展示替のため閉室いたします。

『源氏物語』は今からおよそ千年前、宮廷文化が華開いた平安時代に成立しました。紫式部の執筆した当時から好評を博した『源氏物語』は、その後も多くの読者に書き写され、その理解を深めるための注釈書が編纂されました。また物語の絵画化や意匠化も盛んに行われ、多くの絵画や工芸品が製作されました。さらに江戸時代には、版本が出版されて庶民も広く『源氏物語』に親しむようになり、文学や浮世絵による『源氏物語』のパロディーも生まれました。

本展では写本や注釈書、『源氏物語』に取材した絵画作品・工芸品、そして版本や浮世絵を展示し、『源氏物語』をとりまく多様な世界を紹介します。

源氏物語画帖　朝顔
詞書　徳川秀忠（二代将軍）筆
詞書五十四枚・絵五十四枚の内
江戸時代　17世紀　徳川美術館蔵

「ひなの世界」（展示室1）

◆2月11日（水・祝）～4月5日（日）

徳川美術館「尾張徳川家の雛まつり」展にあわせ、享保雛や古今雛など、町屋のお雛様を紹介します。

展示室1・2

徳川園・蓬左文庫新装オープン10周年記念

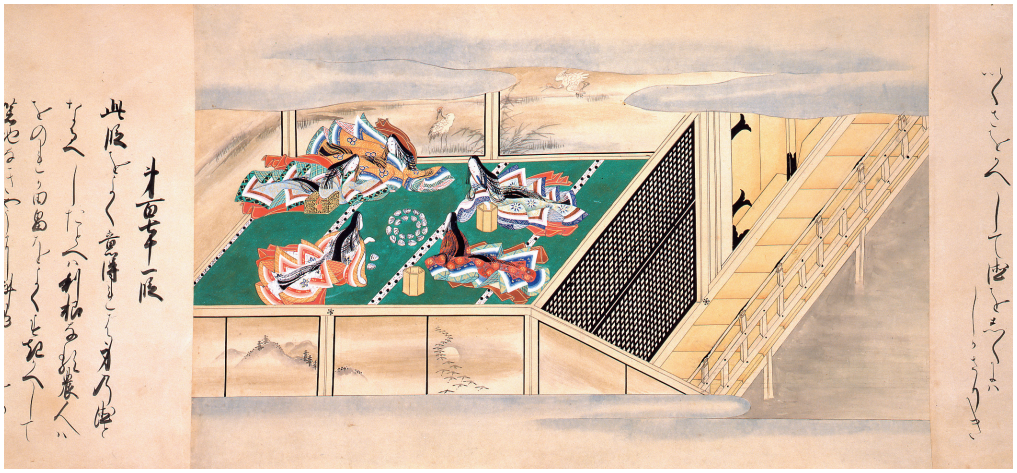
古典文学の世界
大名文化と古典

わが国の記紀・万葉から源氏物語・古今集等々、中国では、詩経から李白・杜甫・白楽天など唐代詩人の詩文集、古典文学の諸作品は、年月を越え読み継がれ、芸術・文化をはじめ様々な分野に影響を与え続けてきました。

江戸時代の大名家において、古典文学に対する知識・教養が重視されたのはもちろん、古典文学の需要層の広がりとも相まって、華やかな調度類をはじめとして大名文化を彩るモチーフに古典文学は様々な場面で登場します。

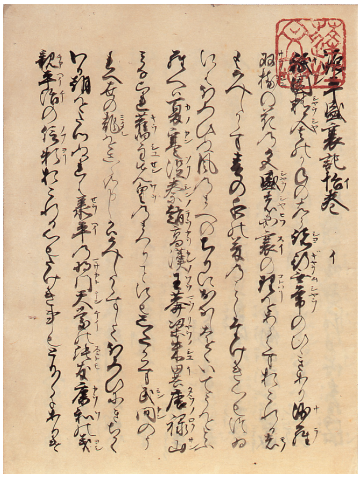
徳川家康や歴代藩主たちが精力的に収集したのは、中国の古典でした。その範囲は、政治、経済、思想から文学、芸術におよんでいます。李白や杜甫、白楽天、陶淵明など我が国でも古くから知られた著名な詩人、学者の詩文集はもちろん、『三国志』を筆頭に『西遊記』『水滸伝』など、古典に取材した小説類の絵入り版本も収集されています。

大名家に伝来した優れた古典文学の写本・版本とともに、古典をテーマにした絵画・工芸などさまざまな大名道具・調度を紹介し、大名文化と古典文学の諸相を紹介します。



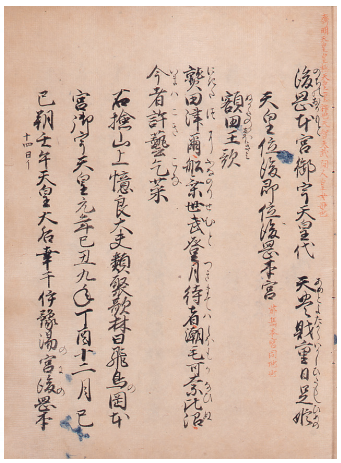
なぐさみ草絵巻　12巻の内　序段（上）181段（下）　江戸時代　17～18世紀　徳川美術館蔵

17世紀半ばに刊行された松永貞徳（1571～1653　俳人・歌学者）の講釈を弟子たちがまとめた『徒然草』の挿絵入り注釈書『なぐさみ草』（慶安5年（1652）跋）をもとに作成された絵巻である。詞書（ことばがき）にあたる『徒然草』の本文・注釈・大意は『なぐさみ草』そのものであり、絵は『なぐさみ草』に収録された全図をモチーフにした157段に、新たに84段分が描かれている。「御側御道具帳」に記録がある尾張徳川家伝来の調度本である。『徒然草』の読者層の広がりが大名家の調度本にも反映した例のひとつであろう。



源平盛衰記（げんぺいじょうすいき）　江戸時代　17世紀　48冊の内

保元平治の乱以降20年余りの源氏と平家の興亡を描いた軍記物語の代表作の調度本。十色以上の色変わりの表紙に金銀泥の鮮やかな筆跡で1冊ごとに異なる図様で山水、花鳥、草木等が描かれ、目を見張る豪華な装幀である。『源平盛衰記』は『東鏡』と並んで、家康が高い関心を示し、慶長10年（1605）金属活字により刊行した書物である。本書の最終巻末には「玄庵三級」なる人物が慶長16年12月に書写を終えたとある。調度本に軍記物語が取り上げられるのは江戸時代の大名文化からである。



万葉集（ひらがな付訓本）
江戸時代　17世紀　11冊の内

8世紀に編纂されたわが国最古の総合的大歌集『万葉集』の写本。四代吉通（よしみち）の生母本寿院（ほんじゅいん）の蔵書である。鎌倉時代の僧仙覚（せんがく）が当時の諸本を校合して読みを付した「新点本」に属するが平仮名を付したものは珍しい。紫地に龍と梅の文様を織りだした絹の表紙に、題箋には金泥で霞がひかれ、見返しは金箔を一面に押して青金の切箔を散らした布目の斐紙、本文は藍の繊維を漉き込んだ飛雲の布目紙の料紙に端正な文字が並ぶ。上質な材料と優れた技術が集約した贅沢な調度本である。

李卓吾先生批評三国志（りたくごせんせいひひょうさんごくし）
中国　明時代　16～17世紀　16冊の内

三世紀前半の中国、魏・呉・蜀三国の歴史書『三国志』に取材した歴史物語。魏の曹操や蜀の玄徳・関羽・張飛の三傑、諸葛孔明等が活躍する。本書は、大衆向け読み物として流布した中国明代の絵入り木版本。マテオリッチが、中国最大の思想家と評した李卓吾（1527～1602）が解説を加えたもの。挿絵右側は、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」の有名な故事で知られる場面。

展示室2

「江戸時代の名古屋をさぐる
―城・まち・ひと―」

慶長十五年（一六一〇）に始まる名古屋築城以来、名古屋の町は四百年以上の歴史を積み重ねてきました。長い歴史を持つ名古屋の町ですが、明治以降の都市計画や戦災復興を経て、現在の市街地から江戸時代の城下町の姿を探るのは難しくなっています。

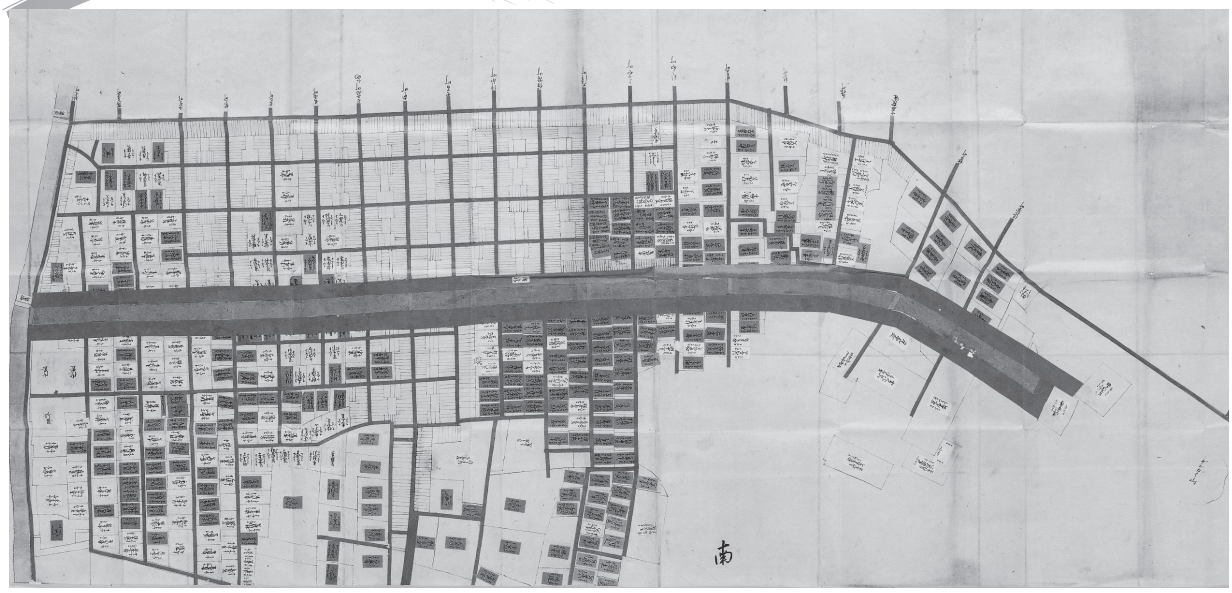
しかしながら、蓬左文庫などに残された絵図や記録は、当時の名古屋の姿を様々なかたちで伝えてくれます。この展示では、江戸時代の名古屋のすがたを、城下図や様々な記録からさぐります。

名古屋城大百科！

金城温古録（きんじょうおんころく）　奥村得義（おくむらかつよし）編　江戸時代　19世紀

尾張藩士で掃除中間頭を務めた奥村得義（1793～1862）が、藩の命を受けて生涯をかけてまとめた「名古屋城大百科」とも言うべき大著。天守・本丸・二之丸など各曲輪（くるわ）・建物に分けて詳細に記され、多くの図面を伴っている。

広小路に謎の運河？



名古屋堀川東伝馬町之図（なごやほりかわひがしてんまちょうのず）　江戸時代　17世紀

広小路周辺を描いた名古屋城下図だが、他の城下図などと異なり、実際よりも大幅に拡張された広小路の中央に水路が描かれている。この図は江戸時代初めの運河計画を示した絵図と考えられているが、正確な作成年代や運河計画の詳細などは不明で、多くの謎を残す。他の城下図には見られない町人地（碁盤割（ごばんわり））の一戸ごとの区画が描かれている点も興味深い。

名古屋城下の調べ方

尾張徳川家の「御文庫」に由来する蓬左文庫は、重要文化財『河内本源氏物語』などを展示室で公開する一方、数千冊におよぶ貴重な古典籍を閲覧できる公立の公開文庫として全国に知られています。また尾張藩の記録類も数多く所蔵し、江戸時代研究の拠点と評価されています。

今回は展覧会に併せ、閲覧室の活用法をご説明します。例えば、名古屋城を調べるには『金城温古録』は欠かせません。『金城温古録』は「名古屋叢書続編」で翻刻刊行されていますので、くずし文字に弱くても大丈夫です。「蓬左遷府記稿」などの記述と突き合わせてご検討ください。

当館では数十種の城下絵図も所蔵しています。大半が町割りの道筋と藩士の屋敷を記したもので、詳細に点検することで新道ができたり、屋敷地が火除け空き地に代わるなどの街の変遷が見えてきます。一部の地図は閲覧室の古絵図データベースで御覧いただけます。

さて、江戸時代の人物を調べるには、まず『名古屋市史 人物編』を参照してください。なかでも、尾張藩士の先祖や著名人を調べたい時には、『藩士名寄』『士林泝洄』などが有効です。これらは膨大な履歴書ですが、下記の「デジタル版『名古屋城下お調べ帳』」の刊行で、パソコン検索ができるようになりました。

その他、藩政史の全般は『尾張徳川家系譜』や『尾藩世紀』（名古屋叢書三編）などを、城下の寺社を調べるには『名古屋市史 社寺編』、城下のまつりなら『尾張年中行事絵抄』（名古屋叢書三編）、地誌なら『金鱗九十九塵』（名古屋叢書正編）や『尾張徇行記』（名古屋叢書続編）などを参考にしてください。基本はご自身でお調べいただきますが、窓口でも可能なかぎりのレファレンスには応じます。どうぞ気軽にお声かけを。このたびの展覧会を契機に「江戸時代の名古屋」をさぐってみてはいかがでしょうか。

稿本　藩士名寄　江戸～明治時代　18～19世紀

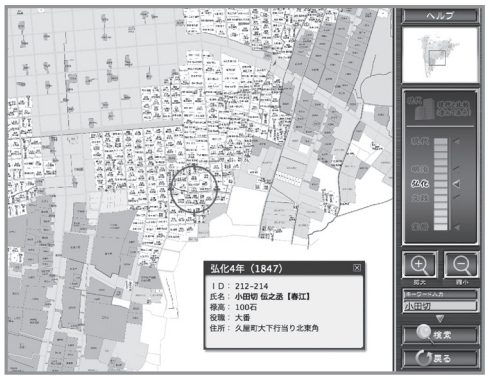
尾張藩士の役職履歴や石高、賞罰、系図などを記した藩士名簿ともいうべき書物。記載年代は明治初年にまで及んでおり、膨大な数の藩士の経歴が記されている。

もっと知りたい人は・・・

デジタル版「名古屋城下お調べ帳」

各時代の城下図や「藩士名寄」をもとに、パソコン上で、明治・弘化・文政・宝暦の各名古屋城下図を現代図と重ねて閲覧できる、画期的なソフトが発売されました。城下図だけでなく尾張藩士の役職、歴代藩主の履歴、尾張の著名人の検索もできる優れものです。

名古屋市博物館・蓬左文庫で販売中。



表紙：奈良絵本　つれづれ草（ならえほん　つれづれぐさ）　六冊　　23.5×17.2㎝（表紙）

奈良絵本　つれづれ草

江戸時代（十七世紀）写

「つれづれなるままに」ではじまる吉田兼好（一二八三～一三五〇?）の有名な随筆『徒然草』序段冒頭部分と挿絵に描かれた草庵に座して執筆する兼好の姿である。とくに本書のこの場面は、近年国語・古文の教科書に数多く採用され、中高生にはなじみの兼好像でもある。

「奈良絵本」と総称される濃彩の挿絵が入った絵入り本である。「奈良絵本」は中世末からお伽草子などを主な題材として製作された庶民感覚の強い絵本であった。江戸時代に入ると、古典文学を題材に華麗な装飾を施した豪華本が作成されるようになり、「調度本」として婚礼調度の定番となった。

本書は、尾張徳川家三代綱誠（つななり）の正室新君（にいぎみ）（一六五四～九二）の蔵書である。新君の母は初代義直の一人娘京姫であり、二代光友の妹にあたる。父広幡忠幸（ひろはただゆき）は、桂離宮を創建した寛永文化の牽引役・八条宮智仁親王（としひと）（後陽成天皇の弟にあたる）を父に持つ人物で京姫との婚姻後は名古屋に居を構えた。新君は、十三才で綱誠との婚礼によって江戸の尾張藩上屋敷に移り、江戸で没した。

享保十四年（一七二九）御文庫に収められた新君の蔵書は、本書を含め、四十二件六百三十二点であったが、江戸後期の御文庫の目録では、五件八十五点である。豪華な表紙や蒔絵の本箱に納められた調度に適した書物は早々に御文庫から持ち出されたようだ。本書は巻子ではなく冊子であったためか御文庫にとどまり、蓬左文庫に引き継がれることとなった。

流麗な筆で書かれた本文に金砂子をふんだんに使用した鮮やかな色彩の挿絵、見返しには金箔が使用され、表紙は龍丸菱格子文金襴で、溜塗の箱の蓋の縁取りには繊細な唐草文様があしらわれている。本文は、近世以降版本を含め一般に流布した烏丸本の系統に属する。挿絵は百四十二図、現在奈良絵本の『徒然草』は十数件確認されているが、挿絵の数は本書が最多である。また、本書も含め、現存奈良絵本の挿絵のほとんどが四頁で紹介した『徒然草』の注釈書『なぐさみ草』と、共通の構図や内容を有しており、強い関連性が確認されている。ただし、版本と奈良絵本の先後の関係については議論が分かれるところである。

「奈良絵本　つれづれ草」表紙

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

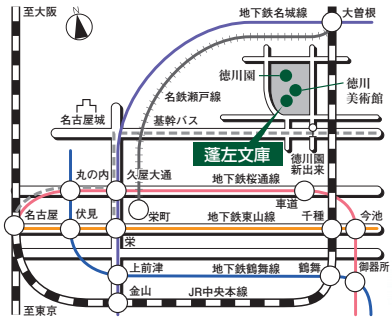
【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）

12月15日(月)～1月3日(土)　特別整理、年末年始休館

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第89号　☆平成26年10月20日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。